

KINJÔ GAKUIN DAIGAKU RONSYŪ

Treatises and Studies by the Faculty of Kinjô Gakuin University

Ser. No. 169

Studies in English Language and Literature

No. 38

- so so so, un un un, and iya iya iya* repetition in Japanese casual conversation by Japanese female
..... Koichi AMANO, Hideki OGISU ... (1)
- 'A Voice is with us'
— Transfiguration of the Heroines
in Wordsworth's Ballads — [II] Michi IGARASHI ... (15)
- A Contrastive Study of Lexical Cohesion
in Japanese Christine OGAWA ... (33)
- Images of the Sea in *The Tempest* :
Chaos, Purification, Rebirth Akiko KATO ... (47)
- Computer Analysis of Second Year
English Compositions David KLUGE ... (61)
- Poe: Reading Three Short Fictions Keiko KOYASU ... (85)
- A Note on the Errata to the 1590
Quarto of *The Faerie Queene* Toshiyuki SUZUKI ... (105)
- 'Punch & Judy' and Dickens
— *The Old Curiosity Shop* as a Fantastic Novel —
..... Matsuto SOWA ... (131)
- On Constructivism, Language Learning
and Authoring Software P. C. THORNTON ... (153)
- Shelley's Use of Feminism: With Special Reference
to the Widows in *Rosalind and Helen*
..... Norikane TAKAHASHI ... (175)
- Fiction as Artificial Life Part III:
Toward a Science of Art? M. A. TAILOR ... (191)
- To Be Wired or Not To Be Wired ?:
Using the Internet for Content-Based
Language Teaching L. B. DAVIES ... (219)
- Language War* in Quebec
— Summer of 1996 — Takashi NIWA ... (237)
- The Languages of Wales in the 20th Century
— a viewpoint from Welsh Studies — (1)
..... Hiroshi MIZUTANI ... (267)
- Antisymmetrical Analysis of
Japanese Noun Phrases Keiko MURASUGI ... (279)
- A Japanese Translation of Rebecca Harding Davis's
"Life in the Iron Mills" [II] Kazunori YOKOTA ... (299)

KINJÔ GAKUIN UNIVERSITY

1996

金城学院大学
論集通巻第169号
英米文学編 (第38号)

- so so so, un un un, and iya iya iya* repetition in Japanese casual conversation by Japanese female
..... 天野絢一, 荻巣秀樹 (1)
- 「我々には一つの声がある」
— ワーズワスの物語詩の中のヒロインたちの
転身と変幻と化身と — [II] 五十嵐美智 (15)
- A Contrastive Study of Lexical Cohesion
in Japanese Christine Ogawa (33)
- 「あらし」における海のイメージ
— 混沌・浄化・再生 — 加藤明子 (47)
- Computer Analysis of Second Year
English Compositions David Kluge (61)
- Poeの三つの作品を読む 子安恵子 (85)
- A Note on the Errata to the 1590
Quarto of *The Faerie Queene* 鈴木紀之 (105)
- 「パンチ&ジュディ」とディケンズ
— 幻想文学としての『骨董屋』 — 楚輪松人 (131)
- On Constructivism, Language Learning
and Authoring Software Patricia Thornton (153)
- シェリーのフェミニズム
— 「ロザリンドとヘレン」の寡婦たちをめぐって —
..... 高橋規矩 (175)
- Fiction as Artificial Life Part III:
Toward a Science of Art? Matthew Aaron Taylor (191)
- To Be Wired or Not To Be Wired ?:
Using the Internet for Content-Based
Language Teaching Lawrence B. Davies (219)
- ケベックの「言語戦争」
— 1996年夏 — 丹羽卓 (237)
- 「英国研究の一環としてのウェールズ学」シリーズ
20世紀におけるウェールズの言語状況
— ウェールズ学的一考察 — (その1) 水谷宏 (267)
- 「半分」を主要部にもつ複合名詞句:
その構造と文法特性 村杉恵子 (279)
- レベッカ・ハーディング・デーヴィス
「鉄工場の生活」翻訳(完結) 横田和憲 (299)

金城学院大学

1996

「半分」を主要部にもつ複合名詞句： その構造と文法特性*

村 杉 恵 子

1. 序 論

Ishii (1991) が指摘しているように、日本語には、「半分」「倍」「5パーセント」などの、割合を示す数量を主要部にもつ「関係節」が存在する。この種の「関係節」においては、「半分」「倍」「5パーセント」は、意味的に関係節の空所の位置に対応するものではない。(1a)についていえば、ボブが使うのは「半分」ではなくて、全部である。また(1d)に示すように、この種の「関係節」は、空所が付加詞に対応する場合にも見られる。

- (1)a. ジョンは [[ボブが家賃に e 使う] 半分] をギャンブルに使う
- b. メリーは [[夫が一月に e 稼ぐ] 倍] を半月で稼ぐ
- c. その大学は [[試験に e 合格した] 35パーセント] を特別待遇生の人数として見込んでいる
- d. ジョンは [[メリーが e 努力した] 倍] 努力した

ところが、英語においては、主要部に割合を示す数量があらわれ、それが意味的に関係節の空所の位置に対応しないような関係節は非文となる。

- (2)a. *John uses [the half [that Bob uses e for rent]] for gambling
 b. *Mary uses [the double [that her husband earns e]] in a month
 c. *The college estimates [35 percent [that e passed the exam]] to be the number of scholarship students

Ishii (1991) は、(1)のような「関係節」を「half relative」と称し、日本語のこの種の「関係節」に量のオペレーター移動が関与しているとする、移動の仮説を提唱している。本論では、日本語には存在しながら、同じ構造をもっては、英語に許される事のできないこの種の「関係節」のメカニズムについて考察する。特に記述的な研究を基に、この種の「関係節」は、移動によって生成されるのではなく、いわゆる pure complex NP である可能性を示唆する。

2. 移動仮説

Ishii (1991) は、これらの「half relative」に移動が関与しているとする根拠として、まず空所が義務的で、空所がないと文は非文となることを挙げている。(3)においては、「お金を」という指示表現が関係節内にあることで、文は非文となっている。

- (3) *ジョンは [ボブが家賃にお金を使う] 半分をギャンブルに使う

第二に、空所は広義において義務的であり、代名詞が空所の位置にあらわれることもできない。

- (4) *ジョンは [ボブが家賃にそれを使う] 半分をギャンブルに使う

第三に、主要部と空所との関係が「unbounded」であることが挙げられている。

- (5) ジョンは [人が [メリーが [自分の妹が e もらうと] 信じている] といっている] 半分を貯金する

第四に、Ishii (1991) は、この空所と主要部との関係は、下接の条件によって制約されていると主張する。

- (6)a. ??ジョンは [メリーが [自分の妹が毎月 e 稼いだ] 事実を] 認めた] 倍を稼ごうと思っている
 b. ??ジョンは [メリーが [e 稼いでから] ヨーロッパにいった半分] も稼がなかった

同様のことは空所が付加詞に対応するときにもいえる。関係が「unbounded」であるのは(7)に示す通りである。

- (7) ジョンは [メリーが [自分の妹が e 努力した] と信じている] 倍努力した

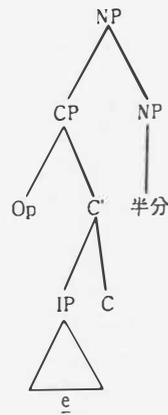
また、空所と主要部との関係は、付加詞の場合も下接の条件によって制約されているように見える。この場合、項を島からとりだすときよりも、文法性が落ちる。このことは、典型的に、ECP に抵触するときの非文法性を示すものとして説明できる。

- (8)a. *ジョンは [メリーが [自分の妹が e 働いた] 事実] を 認めた] 倍、働こうと思っている

- b. *ジョンは [メリーが [e 働いてから] ヨーロッパにいった] 半分も働かなかった

以上が移動仮説の根拠として挙げられているものである。この仮説によると、(9)の構造に示すように、オペレーターは、「関係節」の IP の中から CP の指定部の位置へと移動する。

(9)



次のセクションでは、まず、いわゆる「の関係節」の文法特性について考察し、「half relative」がその一種として分析される可能性を示唆する。

3. 「の」関係節

Kuroda (1992) が指摘するように、日本語には「の関係節」と称される複合名詞句が存在する。¹⁾

- (10)a. [大根を (の) 煮た] の
 b. [キャベツを (の) 細かく切った] の
 c. [糸を (の) 束ねて染めた] の
 d. [土を (の) こねた] の

この種の「関係節」は、下に示すように、「の」以外の主要部をもつことができる。

- (11)a. [大根を (の) 煮た] もの
 b. [キャベツを (の) 細かく切った] やつ
 c. [糸を (??) の 集めて染めた] 束
 d. [土を (??) の こねた] 団子

そして、この種の「関係節」は、(12c)及び(13c)にみるように、主要部の位置に「半分」などの名詞句をもつことができる。

- (12a. その陶芸家は [土を こねた] かたまりを丸めて模様を使う。
 b. その陶芸家は [土を こねた] のを丸めて模様を使う。
 c. その陶芸家は [土を こねた] 一部を丸めて模様を使う。

- (13a. [母がじゃが芋をゆでた] 特製おでん
 b. [母がじゃが芋をゆでた] の
 c. [母がじゃが芋をゆでた] 半分

(12a)の場合、主要部の「かたまり」は、修飾節の「土をこねた」結果あるいは産物を示すものである。(12c)において、「一部」は、その結果あるいは産物の「一部」を指示する。同様のことは(13)についてもいえる。主要部

の「特製おでん」は修飾節の「母がじゃが芋をゆでた」結果を示すものである。そして、(13c)のように「半分」を主要部にもつとき、「半分」であるのは、「母がゆでたじゃが芋」である。同様の例が(14)と(15)である。

- (14a. ジョンは [大根を (/? の) 煮た] 半分をおでんに使う
 b. その織物職人は [糸を (/? の) 束ねて染めた] 15パーセントを特別の機械に入れて、さらに合成させている

- (15a. ジョンは [大根を (? の) 煮えた] 半分をおでんに使う
 b. 調査団は [土砂が (? の) くずれた] 一部をサンプルとして建設省におくった
 c. 東レは [特殊糸が (? の) ちじれた] 5パーセントを特別の機械に入れて、さらに合成させている
 d. 熊谷組は [土が (? の) もりあがった] 一部を今日くずした

以上に示したいいわゆる「の関係節」は、空所が「関係節」の中になくても許されることから、移動によって派生される「関係節」ではないことは明らかである。これらは、むしろ、下に示すような、pure complex NPの構造をもつものであると思われる。²⁾

- (16a. [さんまが焼ける] におい
 b. [ドアが開く] 音

すなわち、「の関係節」は、sentential modifierとして基底生成されていると考えられる。

さて、これらの「の関係節」は、Ishii (1991) の扱っている「half relative」と共通点がある。もういちど、典型的な「half relative」の例を見ておこう。

- (17a. ジョンは [ボブが家賃に e 使う] 半分にギャンブルに使う
 b. メリーは [享主が一月に e 稼ぐ] 倍を半月で稼ぐ
 c. その大学は [試験に e 合格した] 5パーセントを特待生の人数として見込んでいる

(17)と、「の関係節」で「半分」等を主要部にもつ(18)の例とを比較せよ。

- (18a. ジョンは [大根を (/? の) 煮た] 半分をおでんに使う
 b. その織物職人は [糸を (/? の) 束ねて染めた] 5パーセントを特別の機械に入れて、さらに合成させている
 c. その陶芸家は [土を (? の) こねた] 一部を丸めて模様を使う
 d. ジョンは [大根が (? の) 煮えた] 半分をおでんに使う
 e. 調査団は [土砂が (? の) くずれた] 一部をサンプルとして建設省におくった
 f. 東レは [特殊糸が (? の) ちじれた] 5パーセントを特別の機械に入れて、さらに合成させている
 g. 熊谷組は [土が (? の) もりあがった] 一部を今日くずした

これらは、両者とも、次に示すように、「関係節」の主要部に「の」をもち、さらに層格の「の」を挿入した例と意味的に同じものである。(19)は「half relative」の例であり、(20)は、「の関係節」の例である。

- (19a. ジョンは [ボブが家賃に e 使うの] の半分にギャンブルに使う
 b. メリーは [享主が一月に e 稼ぐの] の倍を半月で稼ぐ
 c. その大学は [試験に e 合格したの] の5パーセントを特待生の人数として見込んでいる

- ②0a. ジョンは [大根を (/? の) 煮たの] の半分をおでんに使う
- b. その織物職人は [糸を (/? の) 束ねて染めたの] の5パーセントを特別の機械に入れて、さらに合成させている
- c. その陶芸家は [土を (? の) こねたの] の一部を丸めて模様を使う
- d. ジョンは [大根が (? の) 煮えたの] の半分をおでんに使う
- e. 調査団は [土砂が (? の) くずれたの] の一部をサンプルとして建設省に送った
- f. 東レは [特殊糸が (? の) ちじれたの] の5パーセントを特別の機械に入れて、さらに合成させている
- g. 熊谷組は [土が (? の) もりあがったの] の一部を今日くずした

この平行性は、修飾節と主要部との関係が、(17)の「half relative」と(18)の「の関係節」において同様に解釈されることを示している。

また、「half relative」と同じように、「の関係節」も日本語に特有のものである。(21)に示すように、英語において「の関係節」に対応する複合名詞句は存在しない。

- ②1a. [ジョンが箱を塗った] おもちゃ箱
- b. *the toy box [that John colored a box]
- c. [母がじゃが芋をゆでた] 半分
- d. *the half [that Mother boiled potatoes]

以上の理由から、「half relative」と「の関係節」には統一的な分析が与えられるべきであると考えられる。ところが、Ishii (1991) のオペレーター移動による前者の分析を、そのまま、後者に適用することはできない。上

に述べたように、後者は空所を必要とせず、pure complex NP の構造をもつようである。従って、より一般的に言えば、いかなる移動分析も不可能であろう。そこで、「half relative」と「の関係節」を統一的に分析するためには、前者を pure complex NP と考えるのが妥当であると思われる。

「half relative」と量の名詞を主要部にもつ「の関係節」との間には、相違点も存在する。Ishii (1991) が示したように、前者の主要部は抽象的な量を指す。たとえば、(22)においては、「半分」が示すものは、お金の量である。

- ②2 ジョンは [ボブが家賃に e 使う] 半分にギャンブルを使う

このことは、下の例においても同様で、この場合も、「倍」なのは、やはり、量であって、「キャベツ」そのものではない。

- ②3 豚の挽き肉は [キャベツを (/? の) 細かく刻んだ] 倍をいれる

ところが、先に述べたように(24a)では、「(機械にいれた)5パーセント」の指示するものは、一定量の「糸」であって、糸の量ではない。また、(24b)では「使う」のは、「土」の一部であり、量ではないのである。

- ②4a. その織物職人は [糸を (/? の) 束ねて染めた] 5パーセントを特別の機械に入れて、さらに合成させている
- b. その陶芸家は [土を (? の) こねた] 一部を丸めて模様を使う

これらふたつの名詞句のふるまいの相違点がより鮮明な形であられるのが、下に示す対比である。

25a. その陶芸家は [土を (/? の) こねた] 一部を丸めて模様を使う。

b. *その陶芸家は [土を (/? の) こねた] 倍を丸めて模様を使う。

(25b)は、「の関係節」としては解釈できない。「こねた土」の二倍の「こねた土」は存在しないためである。他方、この例を「half relative」として解釈すると、「倍」なのは、量である。そして、このときも、この文は非文となる。量を「丸める」ことはできない為である。ところが、主要部を「一部」にすることによって、文法性は逆転する。この場合、「一部」を「こねた土」の「一部」として解釈することが可能であり、「の関係節」を含む文として、(25a)は、文法的となる。

しかし、この相違点は、主要部が具体的に指示物をもつか、あるいは、量を示すかの違いに帰することができ、統語的なレベルで区別する必要はないと思われる。むしろ、上に述べたように、これらの複合名詞句を同じ統語構造をもつものとして扱うことにより、「半分」を主要部にもつ「関係節」(複合名詞句)が、日本語にあって英語には存在しないという対照的な問題が、より統一的に説明されうることになるのである。

4. Half Relatives

第3節では、「half relative」が pure complex NP であるとする分析を示唆したが、この仮説を採用した場合、Ishii (1991) が移動分析の根拠として挙げた事実について再検討を行う必要性が生じる。以下、Ishii (1991) の挙げる事実が必ずしも、pure complex NP の仮説と矛盾するものではないことを示す。

Ishii (1991) は、「half relative」においては、空所が義務的に要求されているとしている。「関係節」の中に空所がないと(26b)に示すように、文が非文となることが、移動の仮説を支持するひとつの根拠とされている。

- 26a. ジョンは [ボブが家賃に e 使う] 半分をギャンブルに使う
b. *ジョンは [ボブが家賃にお金を使う] 半分をギャンブルに使う

しかし、(26b)が(26a)に比べて、容認可能性が低いことは、この種の「関係節」の主要部「半分」が、量を示すのに対して、「関係節」中の空所には「お金」という、事物を指す指示表現があることに帰することができるように思われる。この考えに従えば、空所の位置に量を示す名詞句をいれると文は良くなることを予測するが、この予測は、次の例によって、支持される。

- 27a. ジョンは [ボブが豪華マンションの家賃に、多額の金をつぎこむ] 半分を、毎週、ギャンブルにつぎこむ
b. ボブの妻は [ボブが彼女に、毎月わずかな額を渡す] 半分をローンの返済の為に使ってしまう

同様に、Ishii (1991) では、空所が義務的であるとする根拠として、この空所の位置には代名詞も入り得ないことを挙げている。

- 28 *ジョンは [ボブが家賃に それを 使う] 半分をギャンブルに使う

しかし、28の非文性についても、主要部が量を示す一方で、「関係節」中の代名詞(「それ」)がものを指していることから、説明することが可能であると思われる。その根拠として、この空所の位置に量を示す名詞句(あるいは、数量詞)を挿入すると、文は容認可能性が高くなる。

- 29 ジョンは [ボブが家賃に それだけ 使う] 半分をギャンブルに使う

したがって、「関係節」の中に代名詞があらわれえないのは、移動に関与する空範疇がそこにあるからではなく、量を指示することができる代名詞が、(少なくとも日本語には)存在しないことに帰因することができる。

このことは、さらに、次のパラダイムからも証明できる。(30c)と(31c)とを比較せよ。

- (30a) [母がじゃが芋をゆでた] 特製ゆでじゃが
 b. [母がじゃが芋をゆでた] の
 c. [母がじゃが芋をゆでた] それ
 d. [母がじゃが芋をゆでた] 半分
- (31a) 豚の挽き肉は [[玉葱をみじん切りにした] 分量をいれる
 b. *豚の挽き肉は [[玉葱をみじん切りにした] のをいれる (「の」は分量をさす読み)
 c. *豚の挽き肉は [[玉葱をみじん切りにした] それをいれる (「それ」は分量をさす読み)
 d. 豚の挽き肉は [[玉葱をみじん切りにした] 倍をいれる

(30)と(31)では同じように、割合を示す名詞句を主要部にもつ事が可能である。しかし、(30)に示すように、その主要部が具体的な指示物をもつ場合は、代名詞「それ」におきかえられるが、(31)に示すように、主要部が分量(量)を示す場合には、代名詞「それ」におきかえられないのである。このことは、「それ」が量を指すことが出来ない事をより鮮明な形で示しているといえる。

また、Ishii (1991) では、「half relative」において主要部と空所との関係が(32)に示すように「unbounded」であることを、移動仮説の証拠として

挙げている。

- (32) ジョンは [人が [メリーが [自分の妹が毎月 e もらうと] 信じていると] 知っている] 半分で貯金する

ところが、興味深いことに、pure complex NP でも、一見「unbounded」な関係が成り立っているかのような文法特性が観察される。

- (33) 太郎が [さんまが焦げていると] 思ったにおい

同様のことは、「半分」等を主要部にもつ「の関係節」にも見られる。

- (34) 太郎は [花子が [松茸が山に生えている] のをみつけた] 半分を食べってしまった

このように、「half relative」と pure complex NP や「の関係節」は、「unboundedness」について、似た文法性を示している。移動が関与していない pure complex NP 等もこのような文法性を示すという事実は、(32)のような例が「half relative」が移動によって生成されるとする仮説を、必ずしも支持するものではないことを示すものである。

移動の仮説を支える最も重要な根拠として、空所と主要部との関係は下接の条件に制約される点がある。いま一度、Ishii (1991) に示された、項の場合と付加詞の場合について、みてみよう。

- (35a) ?? ジョンは [メリーが [自分の妹が毎月 e 稼いだ事実] を認めた] 倍を稼ごうと思っている
 b. ?? ジョンは [メリーが [e 稼いでから] ヨーロッパにいった] 半

分も稼がなかった

- 36a. **ジョンは [メリーが [自分の妹が e 働いた事実] を認めた] 倍, 働こうと思っている
- b. *ジョンは [メリーが [e 働いてから] ヨーロッパにいった] 半分も働かなかった

まず, 基本的な事実の認定として, 筆者には35と36の間には, 文法性に差がなく, そして, その非文性は一般に下接の条件に抵触するときの悪さよりも, 一層文法的に悪い文のように思われる。³⁾ 主旨を同じくした文法構造をもつ次の例を参照せよ。

- 37) *太郎は [花子が [松茸が生えている] 山に登った] 半分をその日のうちに料理して食べた。

- 38a. ??ジョンは [メリーが [苦勞して e ためてから] でていった] 倍を, たった一ヶ月で苦もなくためてしまった。
- b. ??ジョンは今月 [メリーが [先月 e アルバイトをした事実] を認めた] 倍, アルバイトをしようと思っている。
- c. *ジョンは [メリーが [苦勞して e ためた人] に会った] 倍を, たった1ヶ月で苦もなくためてしまった。
- d. *ジョンは今月 [メリーが [先月 e アルバイトをした人] に会った] 倍, アルバイトをしようと思っている。

37及び38の文法性の低さは, 共通して (39b) に示した文法性の低さと似ているように思われる。

- 39a. 太郎が [さんまが焦げていると] 思ったにおい
- b. *太郎が [さんまを焼いている人] に会ったにおい

39に示す名詞句は, 明らかに, pure complex NPであり, 移動の関与していない複合名詞句である。したがって, ここで移動の制約である下接の条件が働いているとは考えにくい。にもかかわらず, (39b)は非文である。

同様に, 40に示したような, 「半分」などを主要部とした, 量のオペレーターが移動すると考えにくい「の関係節」の場合ですら, いわゆる「下接の条件」に抵触しているかのような非文性が観察される。

- 40a. ??美術鑑定士は [その陶芸家が [土砂を/?の こねた事実] を認めた] 一部を丸めて模様に使ったことを知っている。
- b. ??太郎は, [母が [腐ったじゃが芋をゆでた事実] を認めた] 半分を食べてしまった

いわゆる「下接の条件」に抵触しているかのような非文性が次のような例においても観察される。

- 41a. ??政府は [熊谷組が [土がもりあがった事実] を認めた] 一部を埋め立て地に移動させようと思っている
- b. ??その企業は [織物職人が糸を???の 束ねて染めた事実] を認めた] 5パーセントを特別の機械に入れて, さらに合成させている
- c. ??美術検定士は [その陶芸家が [土砂を/?の こねた事実] を認めた] 一部を丸めて模様に使ったことを知っている

このように, あきらかに量のオペレーターが移動しているとは考えにく

い例においてですら、島の効果のような文法性が観察される。ここから導かれる結論は、「half relative」と称される構造に移動が関与するという議論は決定的なものではないということである。

以上の議論をふまえると、「half relative」が、移動によって生成されるのではなく、いわゆる「の関係節」と称される複合名詞句と同様に、基底生成されるとする仮説と必ずしも矛盾するものではないといえるであろう。

5. 結論と残された問題点

本論では、いわゆる「half relative」と称される「関係節」は、実は、関係節ではなく、基底生成された複合名詞句である可能性を示唆した。最後に、いくつか残された問題について指摘しておきたい。

第一点としては、なぜ、この種の複合名詞句や、pure complex NPにおいて、「unbounded」な関係や、一見、下接の条件が成り立っているかのような文法特性が観察されるのかという点である。(42)の pure complex NPの例をみてみよう。

(42) 太郎が [さんまが焦げていると] 思ったにおい

この例においては、一見、修飾節の補文が「におい」を修飾しているように見えるが、必ずしもそうではない。むしろ、修飾節全体が、関与しているようである。すなわち、「におい」は「太郎がさんまが焦げていると思った」ものであって、「さんまが焦げている」「におい」である必要はない。このことは、(42)の現象が「unbounded dependency」とは独立した、意味上の問題が存在することを示唆する。この例の意味解釈の難しさは、それが(43)と同義であることに帰因すると考えられる。

(43) 太郎が [さんまが焦げているにおい] であると思ったにおい

では、(44)の場合についてはどうか。

(44) *太郎が [さんまを焼いた人] に会ったにおい

この場合は、(43)のような言い換えが許されない。「…と思ったにおい」は意味をなすが、「…に会ったにおい」は意味をなさない。したがって、(42)と(44)の対照は、表層的な意味上の問題として考えられるべきであると思われる。

残された問題の第二点目は、なぜ、そもそも、日本語には「の関係節」のような、空所のない複合名詞句が広く許されるのかという点である。日本語の「関係節」について、その特性をいかに扱うかについては、生成文法の研究の初期の段階から、多くの議論がなされてきている。たとえば、Kuno (1973) は、(45)のような例を基に、主要部と関係節との間に要求されるものは、「aboutness relation」であると主張している⁴⁾。

(45a. [卒業がむずかしい] 物理学

b. [e きている] 洋服が汚れている] 紳士

英語では、主要部に対応する空所（あるいは代名詞）が関係節内に必要であり、(45a)のような例は許されない。(46)を参照せよ。

(46) *physics, which graduation is difficult

本論文で考察した複合名詞句の例は、いわゆる pure complex NP において

も、日本語が、英語よりもはるかに広い修飾関係を許容することを示している。「half relative」を例にとって考えてみよう。

47) 太郎は毎月、[家賃に使う] (その) 半分をギャンブルに使う

この場合、「半分」と「家賃に使う」との間に、「aboutness relation」が成立しているとは考えにくい。後者は、前者についての記述ではない。ここでの修飾関係は、48に示すように、文と文との間に典型的にみられるものである。

48) 太郎は、毎月、家賃に多額の金を使う。そしてその半分をギャンブルに使う。

同様のことが以下の例についてもいえる。

49) 太郎がきのう [さんまが焦げていると] 思った] においが、今もしている

50) 太郎はきのうさんまが焦げていると思った。そのにおいが、今もしている

この「そ(の)」によって示される二文間の関係が、同一名詞句内の修飾関係として許されることが、日本語複合名詞句の特性であるように思われる。

日本語の pure complex NP において、極めて広い修飾関係が許容されることをふまえると、(45a) のような例もまた、pure complex NP である可能性が生じる。51) に示されているように、この例の修飾関係も、47) 及び 49

のそれと類似したものとして捉えることができる。

51) 物理学は、卒業がむずかしい。しかし、その物理学を志す学生は今も多い。

45a の修飾節が非制限的であることが、この例を関係節とみなす根拠の一つであったと思われるが、日本語では、非制限的な pure complex NP もまた、可能なようである。

52) 太郎がきのう [さんまが焦げていると] 思った] このにおいの原因は、今もわからない

Kuno (1973) 以来、日本語において(45a) のような関係節が許される事が、日英語間の大きな相違の一つであると考えられてきた。しかし、本論文でみてきたように、日本語と英語の間に在る、より大きな違いとして、日本語の pure complex NP における修飾関係が、英語のそれと比べて、極めて自由であることを挙げることができる。(45a) も、この日英語間の大きな違いに帰因する一例であると考えるのが妥当であると思われる。

註

*本稿を執筆するにあたり、斎藤衛氏から貴重な示唆を得た。また、本研究は、平成8年度科学研究費(A)No.08710368により助成を受けている。ここに、記して感謝する。

1) Kuroda (1992) は、主に(i)のような例を、“no-introduced relative clause”と分析している。

(i)りんごの赤いの

この例は、いわゆる代名詞の「の」を主要部として、以下の構造をもつと考えられる。

(ii) [NP [NP りんご] の [NP [IP e_i 赤い] の_i]]

(10)に示されているように、こうした関係節は、「を」を伴った名詞句を含むことができる。(10a)の構造は、「大根を」があらわれた場合、(iii)のようになる。

(iii) [NP [IP PRO 大根を煮た] の_i]]

(iii)では、IP内に、主要部に対応する空所が存在せず、主要部の「の」は「煮た大根」を指す。ここでは、(iii)の構造をもつ「関係節」を「の関係節」と呼ぶ。

2) (16a)において、主要部の「におい」は、修飾節の「さんが焼ける」という出来事の一つの結果として解釈できる。従って、(16a)-(16b)の主要部と修飾節との意味関係は、(12a)-(12b)、及び(13a)-(13b)のそれと類似しているように思われる。

3) たとえば、(35a)と、「下接の条件」に抵触する以下のスクランプリングの例とを比較せよ。

(i)?その本を_i、メリーが[自分の妹が_{e_i} 盗んだ事実]を認めた

4) より正確には、Kuno (1973)では、主語が「aboutn essrelation」によって認可されるとし、(45a)については、(i)のような文における主語を関係節化したものとして分析している。

(i)物理学は、卒業がむずかしい

参考文献

- Ishii, Yasuo. (1991) *Operators and Empty Categories in Japanese*. Ph. D. thesis. University of Connecticut, Storrs, CT.
- Kuno, Susumu. (1973) *The Structure of Japanese*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Kuroda, Sig-eki. (1992) *Japanese Syntax and Semantics*. Kluwer Academic Publishers, New York, NY.

レベッカ・ハーディング・デーヴィス

横田 和憲 訳

鉄工場の生活

——鉄屑コールの女像——(完結)

「遅いわ、ヒュウ、もう行かない？」

頑なに頭を振った男の視界から、身を屈めた女の姿が、壁越しに消えた。稀にはありますが、啓示が突如、我が身や世界に、また神に現われたことを皆さんは思い起こされませんか？山頂に立ち人生かく在りなんと臍を噛んだ時の、日常生活の習性が力を失った時の、また友人や妻や兄弟が新しい光を帯びて輝いた時の、そして〈最後の審判の日〉に味わう素裸さで以て赤裸々な魂が墓と向き合う時の、ほんの一瞬を思い起こされませんか？この一瞬が、例の晩、ウルフの生命に訪れた。苛まれてきた苦痛がゆったりとした潮となって、一点に収斂しながら、魂の深淵に打ち寄せていた。それまでは、むさ苦しい日々の生活も、肌に食い込む灰さながら脳裏に食い込む野蛮な粗雑さも、意識に気怠い痛みを覚えさせるだけだった。しかし、今夜は、これら全てが生々しい現実となっていた。男は、煤に塗れて肌にへばりついた汚らしい赤いシャツを握り締め、腕から荒々しく引き裂いた。露になった腕は脂と灰とで濁った色をしていた。心は？魂は？現実には神のみぞ知る惨状を呈しているのだ。

今、ウルフの明白なる詩的感覚を、自分を捨て去った男の姿が閃光のごとく掻き立てた。つまり、この精錬工が自ら知り得る美と真実の全てと調和した、純粋な顔と繊細かつ筋骨逞しい男の姿だった。精錬工の混濁した空想力が〈何か〉大きな姿を思い描いたのだ。意味もなく自らの苦悩を嘲笑する精錬工にとって、ミッチェルのそれに重なった男の姿は、全てを知